

早稲田大学大学院日本語教育研究科

博士学位申請論文概要

論 文 題 目

日本語教育のための情報収集の談話の展開方法
— 韓国人日本語学習者の会話教育の提案 —

申 請 者

小林 友美

2017 年 7 月

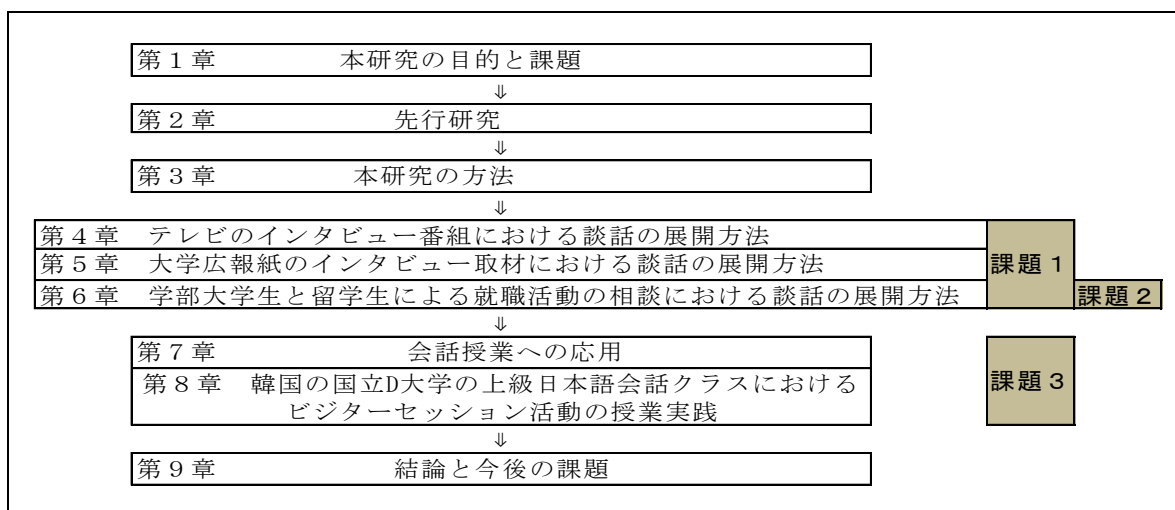
本研究は、韓国人日本語学習者に対する日本語の会話教育に応用することを目的として、日本語の情報収集の談話の展開方法について解明するものである。

本研究の「情報収集の談話」とは、何らかの目的で、ある情報を必要とする質問者が、それに関する情報を有する応答者に対して、情報提供を口頭で求め、必要な情報を得るという一連のコミュニケーション過程のことである。本研究では、学習者が質問者の場合を設定し、情報収集をする際の質問者の役割に焦点を当てて分析をする。

1. 本研究の構成と概要

本論文は、「序論」（第1章）、「本論」（第2～8章）、「結論」（第9章）の全9章より構成される。各章の概要を以下に記す。

【図1】本論文の構成



第1章 本研究の目的と課題

口頭による情報収集は、「質問」と「応答」により必要な情報が獲得できるものから、「質問」と「応答」のみならず、限られた時間内にやりとりから情報を得るものまで多種多様である。後者の質問者は、応答者に応じて臨機応変に対応するなど様々な技術が必要となり、実際の場面では、目標達成に向けて、様々な情報を求めて相手の提供する情報を理解に基づき、さらに情報収集を進めるといった談話展開をしている。そのため、より複雑な談話構造や質問表現をはじめ、様々な口頭表現の運用の習得が不可欠である。しかし、日本語教材¹⁾には、限られた表現形式しか提示されず、授業でも、教師の発問と学習者の解答というやりとりが多く、質問すること自体を学習する機会が少ないように見受けられる。ま

¹⁾ 分析した教科書は、『実践力のつく日本語学習—インタビュー編』、『文化中級日本語Ⅱ』、『トピックによる日本語構造演習テーマ探しから発表へ』、『大学生のための日本語—効果的な学習のために—』の4種である。

た、筆者は、韓国人日本語学習者の日本語教育に携わる機会が多く、授業活動において、「質問」と「応答」を繰り返す談話展開や唐突な話題転換、話題が十分に発展できず、会話が続かないという問題が生じたため、どのように学習すれば、改善できるのかについて考えることがあった。

そこで、本研究は、日本語の情報収集の談話の展開方法を明らかにし、韓国人日本語学習者の会話教育の提案をすることを主な目的とする。

本研究の課題として、次の3点を設定した。

課題1 日本語の情報収集の談話の展開方法には、どのような特徴があるのか。

課題2 日本語母語話者と韓国人日本語学習者の情報収集の談話の展開方法には、どのような特徴があるのか。

課題3 韓国人日本語学習者に対する会話教育において、情報収集の談話の展開方法を学習するために何が必要か。

課題1と**課題2**の分析結果を踏まえて、**課題3**で日本語の会話教育について提案する。そして、実際に授業を実践し、その提案の有効性について検証する。

第2章 先行研究

日本語の談話分析に関する先行研究として、談話構造と「話段」に関する佐久間（1987, 2000, 2003）および、「発話機能」に関するザトラウスキー（1993, 1997）と鈴木（2003, 2007, 2009）の研究を取り上げた。本研究では、参加者の発話の〈要求〉系と〈提供〉系の発話機能の相互作用のやりとりを詳細に分析するため、網羅的に細分化された鈴木（2003, 2007, 2009）の「発話機能」の分類を用いる。

情報収集の談話に関する先行研究として、鈴木（2003, 2007, 2009）、佐々木（1998）、中井（2003）等を取り上げた。先行研究は主に「自由会話」が分析対象なのに対し、本研究は、質問者と応答者の役割が明確な情報収集の談話が対象であるため、参加者別の特徴に相違があると予想して、より詳細な分析結果を出すことを目的とすることを述べた。

日本語の会話教育に関する先行研究として、斎藤（1989）、横須賀（2000）を取り上げた。最後に、韓国語母語話者を対象にした先行研究として、梅木（2009）、高木（2013）を取り上げた。本研究は、韓国語母語話者を主な対象とするため、同様の発話連鎖や談話展開が観察される可能性があるという仮説を立てた。

第3章 本研究の方法

本研究では、【表1】の全3種の日本語の情報収集の談話を分析対象として用いる。

【表 1】本研究の分析対象

	【資料1】	【資料2】	【資料3】
種類	テレビのインタビュー番組	大学広報紙のインタビュー取材	就職活動の相談
所要時間	各資料約7分間 【資料1-1】～【資料1-10】 全10資料、計約1時間 発話総数1,761発話	各資料約1時間 【資料2-1】～【資料2-3】 全3資料、計約3時間 発話総数5,544発話	各資料約15分間 【資料3-1】～【資料3-16】 全16資料(母語場面全8資料/接触場面全8資料) 計約4時間 母語場面: 発話総数3,845発話 接触場面: 発話総数3,531発話
参加者	質問者(女性キャスター)1名 応答者(各テーマに関する専門家)10名	質問者(大学生活課の担当者)2名 応答者(卒業生、在校生)3名	母語場面 質問者(活動中の母語話者)8名 応答者(活動経験者の母語話者)2名 接触場面 質問者(活動中の韓国人上級日本語学習者)8名 応答者(活動経験者の母語話者)2名
内容	テーマについてのVTRとインタビューから構成されている。本研究ではインタビュー部分のみ分析する。	人物紹介の記事のインタビュー取材。	就職活動中の大学生(質問者)が経験者の大学生(応答者)から、活動経験や助言を聞く。

分析観点は、(1) 情報収集の談話構造、(2) 情報収集の質問の提出順、(3) 情報収集に用いる表現形式の3点である。(1)で、談話の全体構造を明らかにし、(2)で、「話段」の展開方法を明らかにするために、「話段」の中の質問の提出順を分析する。(3)で、情報収集に用いられる質問者の表現形式を分析する。

(1) 情報収集の談話構造については、ザトラウスキー(1993)の「発話機能」を再分類した鈴木(2003, 2007, 2009)の【表2】に示す分類を用いて分析した。

【表 2】鈴木(2009)の相談の談話における「発話機能」の分類

I. 相手に対する呼びかけや、自身の発話に含まれる間投表現	
1 注目要求☆	2 間投表現
II. 談話表示★	
A 話題開始機能	
a1 話を始める機能	a2 話を再び始める機能
B 話題継続機能	
b1 話を重ねる機能	b2 話を深める機能
b3 話を進める機能	b4 話をうながす機能
b5 話を戻す機能	b6 話をはさむ機能
b7 話をそらす機能	b8 話をさえぎる機能
b9 話を变える機能	b10 話をまとめる機能
C 話題終了機能	
c1 話を終える機能	c2 話を一応終える機能
III. 要求	
1 確認要求*	2 判定要求*
3 選択要求*	4 説明要求*
5 単独行為要求☆	6 共同行為要求☆
7 言い直し要求☆	
IV. 提供	
1 事実報告	2 意見説明
3 感情表出	4 意志表明
5 選択情報提供	6 言い直し☆
7 応答	
V. 受容	
1 関係作り・儀礼☆	2 自己注目表示☆
3 相手への注目表示	
a 継続	b 承認
d 確認	e 興味
g 終了	f 共感
	h 同意

(注) 鈴木(2009:78)の【表3-6】の転載。

「II. 談話表示」の下位項目14種(★)は、佐久間(2002)の「接続表現の文脈展開機能」による。

「III. 要求」の下位項目7種のうち、*で示した4種は、国立国語研究所(1960)による。

☆で示した〈単独行為要求〉〈共同行為要求〉〈言い直し要求〉、IV.の提供の〈言い直し〉、およびV.受容の〈関係作り・儀礼〉、〈自己注目表示〉はザトラウスキー(1993)による。

本研究の分析対象の発話の名称に相応しいことから、鈴木（2009：78）の〈Ⅳ 1．事実報告〉、〈Ⅳ 2．意見説明〉、〈Ⅳ 3．感情表出〉は、鈴木（2003）の〈Ⅳ 1．事実説明〉、〈Ⅳ 2．見解表明〉、〈Ⅳ 3．評価表明〉の名称に従う。「発話機能」の組み合わせと内容上のまとまり、参加者の目的をもとに、佐久間（2003：95）の「話段」を認定し、その結果から談話構造を明らかにする。また、話段を構成する発話連鎖についても分析する。

（2）情報収集の談話における質問の提出順は、各「話段」における質問者の〈Ⅲ．要求〉系の発話機能の出現傾向を分析する。また、質問形式を「1. 事実を求める質問」、「2. 意見を求める質問」、「3. 助言を求める質問」の3種に分類し、どの質問がどのように提示されるのかを明らかにする。

（3）情報収集に用いる表現形式は、質問者の情報収集の特徴的な発話を抽出し、表現形式と発話機能を明らかにする。

以上の分析観点から、日本語の情報収集の談話の展開方法を解明する。**課題 1**で、【資料 1】～【資料 3】の種類の異なる母語場面の情報収集の談話に共通する特徴があるのか、談話の展開方法を明らかにする。**課題 2**で、会話の授業に応用する目的から、【資料 3】就職活動の相談を用いて、日本語母語話者と韓国人日本語学習者による情報収集の談話の展開方法の特徴を明らかにし、課題を考察する。最後に、**課題 1**と**課題 2**の分析結果から、**課題 3**の日本語の情報収集の談話の展開方法をどのように会話教育に応用するのかを提案し、韓国の国立D大学における授業実践によって検証する。

第4章 テレビのインタビュー番組における談話の展開方法

（1）情報収集の談話構造

【資料 1】は、全 10 資料が同じ種類の話段と同じ数、同じ提出順序で分類され、【表 3】のような基本的な談話構造があった。

【表3】テレビのインタビュー番組における基本的な談話構造

大話段1	大話段2	話段	小話段
Ⅰ．開始部		1. 開始の挨拶	
		2. テーマ提示のVTR放映	テーマ提示のVTR放映
		3. テーマ提示	
Ⅱ．展開部	Ⅱ－1. 開始部	1. VTR①放映	VTR①放映
			(1) ゲストの紹介
	Ⅱ－2. 本題部	1. VTR①の確認	(2)
			(3)
		2. VTR②放映	(4) VTR②の紹介
			VTR②放映
		3. VTR②の確認	(5)
			(6)
			(7)
		4. 意見質問と応答	(8)
	Ⅱ－3. 終了部	1. 感謝の挨拶	(9)
Ⅲ．終了部		1. 終了の挨拶(予告)	

(注)「小話段」の(2)～(9)には、各資料の話題が入る。「小話段」の数は、全 10 資料の平均である。

（２）情報収集の質問の提出順

質問形式の３分類によると、はじめに VTR の確認やテーマに関する「1. 事実を求める質問」をする。次に、応答者の「2. 意見を求める質問」から「3. 助言を求める質問」という提出順である。

（３）情報収集に用いる表現形式

インタビュアーは、主に〈Ⅲ．要求〉の〈Ⅲ1. 確認要求〉（171 発話、22.5%²）、〈Ⅲ4. 説明要求〉（38 発話、5.2%）、〈Ⅲ2. 判定要求〉（29 発話、3.8%）の３機能を用いて、ゲストから情報収集をする。また、情報収集のために、「a. 応答確認」、「b. 前置き＋質問」、「c. 話題転換」をしていた。これは、放送時間内に視聴者に情報を分かりやすく提供するためのインタビュアーの方略として考えられる。

第５章 大学広報紙のインタビュー取材における談話の展開方法

（１）情報収集の談話構造

【資料２】には、３種の大話段が、「Ⅱ．展開部」には、「活動の背景」、「バックグラウンド」、「今後の活動」、「アドバイス」の４種の話段が認定された。自然談話のインタビュー取材の談話の話段は、資料により、話段の数や順番が異なり、同じ種類の話段が複数回出現することから、複雑な構造であることがいえる。

（２）情報収集の質問の提出順

質問形式の３分類の結果から、「Ⅱ．展開部」の大話段には、「1. 事実を求める質問」を前半部にし、後半に「2. 意見を求める質問」、最後に「3. 助言を求める質問」が用いられる。これは、【資料１】インタビュー番組と同様の結果である。

（３）情報収集に用いる表現形式

質問者であるインタビュアーは、主に〈Ⅲ1. 確認要求〉（387 発話、13.7%³）、〈Ⅲ2. 判定要求〉（236 発話、8.3%）、〈Ⅲ4. 説明要求〉（118 発話、4.2%）を用いて情報収集をする。【資料１】のインタビュー番組は、多くの情報を要求する〈Ⅲ4. 説明要求〉を、【資料２】のインタビュー取材は、「はい/いいえ」で答えられる〈Ⅲ2. 判定要求〉を用いて、効率よく情報収集をする。インタビュアーには、「a. 応答確認」、「b. 前置き＋質問」、「c. 話題転換」、「d. 応答のまとめ」、「e. 応答に対する反応」、「f. 共通の話題」という特徴があった。

「a. 応答確認」、「b. 前置き＋質問」、「c. 話題転換」は【資料１】インタビュー番組と共

² インタビュアーの発話機能総数 761 発話における割合である。

³ インタビュアーの発話機能総数 2,824 発話における割合である。

通するが、自然談話である【資料 2】インタビュー取材は、その外の特徴も認められた。インタビュー取材のインタビュアーは、〈V. 受容〉の〈V a. 継続〉や〈V b. 承認〉の外、〈V e. 興味〉や〈V f. 共感〉、〈IV. 提供〉を用いて「e. 応答に対する反応」をしたり、応答者との「f. 共通の話題」を提示したりするなどして、話題を共有し、会話に積極的に参加していることが明らかになった。

第 6 章 学部大学生と留学生による就職活動の相談における談話の展開方法

【資料 3】を分析した結果、学部大学生と韓国人日本語学習者の留学生とでは、情報収集の談話の展開方法に相違があることが明らかになった。「2. 本研究の結論」で後述する。

第 7 章 会話授業への応用

第 7 章では、**課題 1**と**課題 2**における分析結果をまとめた。また、教材分析と 2009 年から 2013 年に至る筆者の日本語の会話クラスの授業実践における課題を通して、韓国人上級日本語学習者を対象とする会話教育への応用を提案した。

第 8 章 韓国の国立 D 大学の上級日本語会話クラスにおけるビジターセッション活動の授業実践

第 8 章では、第 7 章で提示した授業案をもとに、韓国の国立 D 大学において、韓国在住の日本語母語話者の協力のもとに、全 2 回のビジターセッション活動と会話分析活動を取り入れた授業を実施し、授業の実践報告を述べた。

第 9 章 結論と今後の課題

第 9 章で、本研究の各章の概要をまとめ、結論と今後の課題を述べた。「2. 本研究の結論」と「3. 本研究の意義と今後の課題」で後述する。

2. 本研究の結論

本研究の結論は、以下の 3 点である。

結論 1

日本語の情報収集の談話展開の方法に関して、日本語の 3 種の情報収集の談話の「1. 談話構造」、「2. 質問の提出順」、「3. 表現形式」を分析した結果、次のような共通点があることが明らかになった。

1. 談話構造

本研究の情報収集の談話は、質問者が応答者に対して、段階的な手順を踏んで展開するものである。分析の結果、【表 4】に示すような基本的な談話構造が認められた。

【表 4】情報収集の基本的な談話構造

I. 大話段	II. 話段	III. 小話段
I. 情報収集の目的説明	1. 開始の挨拶	
	2. 自己紹介	
	3. 質問者の情報収集の目的説明	
II. 情報収集の展開	1. 基本的な情報収集(事前質問)	1. 事実を求める質問 2. 意見を求める質問 3. 助言を求める質問
	2. テーマに関する情報収集	
III. 情報収集の目的完了	1. 情報収集に対する感想	
	2. 終了の挨拶	

本研究は、「問い—答え」からなる発話の隣接ペアも 1 話段として捉えた。【表 5】に、全 3 種の情報収集の談話に観察された 1 話段中の発話連鎖を、各種類の発話機能の組み合わせとともに示す。

【表 5】1 話段中における発話連鎖の種類

話段 参加者 種類	話段1						話段2
	①質問者	②応答者	③質問者	④応答者	⑤質問者	⑥応答者…	
1	質問	応答					質問
	〈要求〉	〈受容〉/〈提供〉					〈要求〉
2	質問	応答	反応				質問
	〈要求〉	〈受容〉/〈提供〉	〈受容〉/〈提供〉				〈要求〉
3	質問	応答	応答確認	応答確認反応			質問
	〈要求〉	〈受容〉/〈提供〉	〈要求〉	〈受容〉/〈提供〉			〈要求〉
4	質問	質問確認	質問確認反応	応答	反応		質問
	〈要求〉	〈受容〉/〈要求〉	〈受容〉/〈提供〉	〈受容〉/〈提供〉	〈受容〉/〈提供〉		〈要求〉
5	質問1	応答1	反応1+質問2	応答2	反応2+質問3	応答3…	質問
	〈要求〉	〈受容〉/〈提供〉	〈受容〉/〈提供〉 + 〈要求〉	〈受容〉/〈提供〉	〈受容〉/〈提供〉 + 〈要求〉		〈要求〉

5 種類全ての発話が使用されており、母語話者は、それらを適宜組み合わせ、談話を展開する。この発話連鎖は、「III. 小話段」の下位次元に位置し、それぞれ異なる発話連鎖の種類が反復される。日本語の情報収集の談話は、大小様々な話段が多重構造をなして展開する。

2. 質問の提出順

「2. テーマに関する情報収集」の話段は、まず、「1. 事実を求める質問」をして、基本的情報を押さえ、次に、「2. 意見を問う質問」を、最後に、「3. 助言を求める質問」をするという典型的な提出順で展開する。

3. 表現形式

質問者は、【表 6】の「a. ~f.」の様々な発話機能の組み合わせによる表現形式を用いる。全 3 種の資料に共通したのは、「b. 前置き + 質問」である。「前置き」には、「1. 応答者の先行発話」、「2. 自分の見解」、「3. 伝聞」、「4. 話題の予告」、「5. 自分（母国）

の状況」の5種が含まれるが、これは、質問者が応答を振り返り、要点をまとめ、応答者に質問を理解してもらう配慮をする質問である。質問者は、情報収集の目的達成に向けて、様々な表現形式を用いている。

【表6】日本語の情報収集に用いる表現形式

特徴	表現形式	発話機能
a. 応答確認	1 語レベルの応答のくり返し。	〈V. 受容〉〈確認〉
	2 ～です(ね/よね)。	〈Ⅲ. 要求〉〈確認要求〉
	3 ～ということですか(。/ね)	〈Ⅲ. 要求〉〈確認要求〉
	4 ～わけですね。	〈Ⅲ. 要求〉〈確認要求〉
b. 前置き+質問	5 ～ですが、～か。	〈Ⅳ. 提供〉〈事実説明〉+〈Ⅲ. 要求〉
	6 ～ですけど、～か。	〈Ⅳ. 提供〉〈事実説明〉+〈Ⅲ. 要求〉
	7 ～ですけども、～か。	〈Ⅳ. 提供〉〈事実説明〉+〈Ⅲ. 要求〉
	8 ～と思うんですが、～か。	〈Ⅳ. 提供〉〈見解表明〉+〈Ⅲ. 要求〉
c. 話題転換	9 では、～	〈Ⅱ. 談話表示〉〈話を始める機能〉/〈話を再び始める機能〉/〈話を变える機能〉
	10 じゃ、～	〈Ⅱ. 談話表示〉〈話を始める機能〉/〈話を再び始める機能〉/〈話を变える機能〉
	11 じゃあ、～	〈Ⅱ. 談話表示〉〈話を始める機能〉/〈話を再び始める機能〉/〈話を变える機能〉
	12 じゃあ、ちょっと話は変わるんですけど	〈Ⅱ. 談話表示〉〈話を始める機能〉/〈話を再び始める機能〉/〈話を变える機能〉+
	13 じゃ、次は～についてなんですが、	〈Ⅱ. 談話表示〉〈話を始める機能〉/〈話を再び始める機能〉/〈話を变える機能〉+
d. 応答のまとめ	14 先行発話を繰り返す。 例:Aさんのお話を伺うと、～。	〈Ⅳ. 提供〉〈事実説明〉
e. 応答に対する反応	15 そうですか。	〈V. 受容〉〈承認〉
	16 そうなんですか。	〈V. 受容〉〈承認〉
	17 そうなんですね。	〈V. 受容〉〈承認〉
	18 なるほど。	〈V. 受容〉〈承認〉
	19 そうですよ。	〈V. 受容〉〈共感〉
	20 へー。	〈V. 受容〉〈興味〉
	21 おー。	〈V. 受容〉〈興味〉
	22 ほう。	〈V. 受容〉〈興味〉
	23 あー。	〈V. 受容〉〈興味〉〈共感〉
	24 分かりま(す/した)。	〈Ⅳ. 提供〉〈見解表明〉
f. 共通の話題	25 感想 例:～(形容詞)ですね。参考にりました。	〈Ⅳ. 提供〉〈評価表明〉/〈見解表明〉
	26 私も～。	〈Ⅳ. 提供〉〈事実説明〉

ただし、テレビ番組の【資料1】と自然談話の【資料2】、【資料3】では、「発話機能」の用いられ方が異なっていた。【資料1】は、質問者が主に〈Ⅲ. 要求〉系の発話で情報収集をするのに対し、【資料2】、【資料3】では、〈Ⅲ. 要求〉系の外、〈V. 受容〉、〈Ⅳ. 提供〉の発話で「e. 応答に対する反応」を示し、会話に積極的に参加して情報収集をしている。この相違は、談話の種類や参加者の役割と情報収集の目的によるものである。

結論 2

日本語母語話者と韓国人日本語学習者の談話の展開方法に関して、【資料3】の学部大学生の就職活動の相談を分析した結果、日本語母語話者と韓国人日本語学習者で、「1. 談話構造」、「2. 質問の提出順」、「3. 表現形式」に共通点と相違点があることが明らかになった。

1. 談話構造

「大話段」の出現数と提出順は共通しているが、「話段」の出現数は、学習者の方が多

く、話題が多岐に渡る。日本語母語話者は、【表 5】の 5 種を適宜組み合わせ、談話を展開しており、「質問－応答－反応」や「質問 1－応答－反応＋質問 2…」のように、一つの話題について、応答に関連する質問を重ねて発展するやりとりをしており、質問者と応答者の相互作用により、談話が展開されている。1 話段中の「質問－応答」に、小規模の「質問－応答」が含まれ、大小の話段からなる多重構造が展開している。これは、**課題 1**の【資料 1】インタビュー取材と【資料 3】就職活動の相談と同じ傾向である。一方、韓国人日本語学習者は、話段数が多く、1 話段中の発話数は少ない。学習者は、【表 5】の「種類 1（質問－応答）」の発話連鎖が多い。1 話段中の「質問－応答」の小話段が少なく、質問者の「質問」と応答者の「応答」の単一の発話連鎖から形成される話段が多い。

また、母語話者は、1 つの話題において発話を重ねて掘り下げる談話展開の方法によって、〈V e. 興味〉や〈V f. 共感〉で反応し、〈IV. 提供〉で共通の話題提示をして、相互作用の顕著な情報収集をする。学習者の質問者は、主に〈III. 要求〉の表現で、多くの話題提示をし、それに対応する応答を収集する「質問－応答」を繰り返すような談話展開の方法を取り、応答への反応や〈IV. 提供〉が少なく、相互作用が希薄な傾向がある。

2. 質問の提出順

【資料 3】の全 16 資料において、質問の提出順は資料ごとに異なるが、そのうち、13 資料に「1. 事実を求める質問」、「2. 意見を求める質問」、「3. 助言を求める質問」という 3 種の質問形式が用いられていた。また、「3. 助言を求める質問」が、「II. 展開部」の大話段の中間と後半の 2 か所に位置するという共通点がある。

3. 表現形式

母語話者は、【表 6】の表現形式を用いている。1 つの話題に関連する質問を重ねたり、応答に対する「a. 応答確認」、「b. 前置き＋質問」、「c. 話題転換」、「d. 応答のまとめ」、「e. 応答に対する反応」、「f. 共通の話題」を提示して、積極的に話に参加する。学習者も「a. b. c. e」は共通するが、出現数や表現形式の種類は少ない。学習者は、主に〈III. 要求〉系の発話を用いて談話展開をしており、「応答」から発展したやりとりや「e. 応答に対する反応」が少ない。そのため、応答者との相互作用を意識した談話展開のための表現形式を学習する必要がある。

結論 3

結論 1と**結論 2**における「1. 談話構造」、「2. 質問の提出順」、「3. 表現形式」を応

用した「1. 情報収集の談話全体の展開方法」、「2. 情報収集の話段の展開方法」、「3. 日本語の情報収集の談話の相互作用に基づく展開方法」の3点が、情報収集の談話展開の方法を学習するために有効だと判断された。

1. 情報収集の談話全体の展開方法

日本語の情報収集の談話は、【表4】のような基本的な談話構造に基づく談話展開の方法がある。会話の授業では、3種の大話段を「Ⅰ. はじめ→Ⅱ. インタビュー→Ⅲ. おわり」として導入し、話段を「1. 開始の挨拶→2. 自己紹介→3. 事前質問→4. テーマ質問→5. 感想→6. 終了の挨拶」という5段階の会話の手順で示す。

2. 情報収集の話段の展開方法

質問者が日本語で効率よく情報収集をするには、基本的な「質問の提出順」に沿って、話段を展開する必要がある。授業では、応答者が答えやすい質問の提出順として、「1. 事実を求める質問」、「2. 意見を求める質問」、「3. 助言を求める質問」を提示し、質問者が、話題を提示した後、前半部に「1. 事実を求める質問」をして、後半部に「2. 意見を求める質問」、最後に、「3. 助言を求める質問」をする手順があることを【資料1】テレビのインタビュー番組のVTRを視聴して学習させる。また、1つの話題のまとまりを意識して談話を展開することの重要性を指導し、「会話の進め方・表現例」のプリントを配布して、段階的な「表現形式」の使い分けをするよう指示する。

3. 日本語の情報収集の談話の相互作用に基づく展開方法

質問者は、〈Ⅲ. 要求〉系の発話機能による質問のみならず、〈Ⅴ. 受容〉や〈Ⅳ. 提供〉を用いて、応答者の応答に対する理解や共感を示しつつ、応答者との相互作用を意識した談話の展開方法を用いていた。授業では、【資料3】就職活動の相談のVTRを視聴し、相互作用に基づく談話の展開方法を導入する。

以上の3点が日本語の情報収集の談話展開の方法を学習するために、有効か否かについて、韓国のD大学で、インタビュー活動を用いた全2回のビジターセッション活動と会話分析活動を導入した会話の授業を実践した。その結果、応答者であるビジターの評価（11設問の5段階評価）において、質問者である受講生16名中の14名が学習前よりも学習後が高く評価され、学習後の「2. 質問の順番」、「3. 質問の仕方」、「11. 話題転換」に関する肯定的な評価記述が確認された。また、教室活動の中で学習項目を習得し、実際の会話に反映させたことも確認でき、それをビジターに評価されたことが確認できた。さらに、学習者のワークシートや意識変化を分析した結果、学習後の方が自己評価が高く、気づきや学

び、自身の日本語や会話参加への意識が変化したことが明らかになった。

従って、「1. 情報収集の談話全体の展開方法」、「2. 情報収集の話段の展開方法」、「3. 日本語の情報収集の談話の相互作用に基づく展開方法」の3項目に基づく授業実践が、情報収集の談話展開の方法を学習するために有効だと考えられる。

3. 本研究の意義と今後の課題

情報収集活動における談話展開の技術を解明する研究は、あまり多いとはいえない中で、種類が異なる3種の情報収集の談話を分析して、それぞれの談話展開の方法を解明した点に、本研究の一つの意義がある。また、分析結果を、日本語の会話教育に応用して、授業実践をしたことも本研究の意義といえる。

今後は、質問者と応答者の相互作用による情報収集の談話の展開方法をより精密に解明する必要がある。本実践の反省を踏まえて、情報収集の日本語の会話教材を開発し、授業実践を重ねていく所存である。

【主要参考文献】

- 梅木俊輔（2009）「ターン管理と発話連鎖への期待に関する一考察－韓日接触場面における情報要求場面を中心に－」『言語科学論集』13. pp. 71-82
- 小林友美（2010）「テレビのインタビューの談話における『話段』の展開」『国語研究』7. pp. 34-46
- （2015）「韓国の大学におけるビジターセッションと会話分析を取り入れた授業－実践報告と学習者の意識変化」『日語日文学』67. pp. 99-114
- 佐久間まゆみ（1987）「文段認定の一基準（Ⅰ）－提題表現の統括－」『文藝・言語研究言語篇』11 pp. 89-135
- （2002）「3. 接続詞・指示詞と文連鎖」野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則共著『日本語の文法4 複文と談話』岩波書店 pp. 119-189
- （2003）「第5章 文章・談話における「段」の統括機能」『朝倉日本語講座7 文章・談話』朝倉書店 pp. 91-119
- 佐々木由美（1998）「初対面の状況における日本人の「情報要求」の発話－同文化内および異文化間コミュニケーションの場面」『異文化間教育』12. pp. 110-127
- 鈴木香子（2009）『機能文型に基づく相談の談話の構造分析』早稲田大学モノグラフ 11a 早稲田大学出版部
- 高木丈也（2013）「日本語と韓国語の自然談話に現れる『くり返し発話』」『待遇コミュニケーション研究』10. pp. 52-67
- 中井陽子（2003）「話題開始部で用いられる質問表現－日本語母語話者同士および母語話者／非母語話者による会話をもとに」『早稲田大学日本語教育研究』2. pp. 37-54
- ポリ・ザトラウスキー（1993）『日本語の談話の構造分析－勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版
- 横須賀柳子（2000）「情報取りにおける聞き手のストラテジー」『ICU日本語教育センター紀要』10. 41-57